View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

岩木山の宗教景観について

――模擬岩木山・末社・石碑を中心に――

金　子　直　樹

Ⅰ　はじめに

日本各地にみられる山岳信仰には，広域な信仰圏を有すものが少なくない。これは主に中近世に御師などの宗教者が配札・祈祷の布教活動を行ったことに起因している。そうした地域では，本山へ登拝・参詣をするための講組織が形成されたり，新たに建立された末社・末寺や石碑類を拠点に新たな活動が発生したりもする。

こうした状況は，既存の信仰圏研究では，対象山岳を直接遙拝できる可視的範囲（第一次信仰圏）を越えた，遠方地域（第二次・第三次信仰圏）において卓越するものとされている（文献㉖：277–78 頁。以下，番号のみ表記）。ただしこれは，あくまで山岳信仰の伝播をモデル的に理解しようとしたものであって，第一次信仰圏内でも御師の活動は確認され，末社や石碑も存在している。例えば，多数の山岳信仰が存在する東北地方では，有名な出羽三山の他，山形県置賜地方や福島県会津地方では飯豊山，山形庄内地方や秋田県南部では鳥海山や秋田県では太平山などの，比較的ローカルな信仰圏を持つ山岳の末社・石碑が多数確認できる。

ところが，本稿で対象にする青森県の岩木山の場合，津軽地方に濃厚な信仰圏が認められるにもかかわらず，山麓の里宮（岩木山神社）などを除くと，他の山岳のような末社・石碑は極めて少ない。これは，津軽地方のどこからでも岩木山を直接望見できるため，あえてそれらを必要としなかった（⑫：51 頁）

というような素朴な信仰形態であり，その信仰圏も第一次信仰圏レベルにとどまっているとされるのである。これは，岩木山および岩木山神社への参詣習俗（お山参詣）が，御師を介さず，主に民衆の自発的意思によって行われることからも確認される。

しかし，岩木山の信仰圏は，岩木山を望見できない一部の地域を含む旧津軽藩領に一致していることから，藩の影響を受けていたことも指摘されている。近世の岩木山は「津軽総鎮守」として位置づけられ，別当の百沢寺（現・岩木山神社）も寺領 400 石を与えられ，藩によって庇護されていた。このこともあってか，百沢寺は他の山岳信仰のような御師による活動を行わなかった（⑤：6 頁）。したがって，岩木山の末社・石碑の少なさは，近世の政治的背景に起因すると考えられる。

しかし数が少ないとはいえ，岩木山関連の末社は実際に存在し，また岩木山に見立てた小山や丘に設けられた「模擬岩木山」と呼ばれるものも知られている。これは，旧暦 8 月 1 日前後に行われる岩木山のお山参詣に平行して，岩木山本山の代わりに参詣される。この「模擬岩木山」に関しては，これまでにいくつか報告がされているが，それ以外に存在する末社や石碑はほとんど検討されていない。また「模擬岩木山」について，その定義づけも曖昧なままにされている。よってここでは，岩木山の末社・石碑を網羅的に紹介しつつ，「模擬岩木山」概念についても再検討することにし，岩木山信仰の歴史とそれらの関係性を考えることにしたい。

II 「模擬岩木山」について

(1) 既存研究の整理

前述のように山岳信仰の信仰圏は，その広域性によって本山からの遠隔地を含んでいる。そうした場所からの本山への登拝は，物理的・経済的負担を費やすことになる。このため富士山信仰における富士塚のように，近隣の小山や人工的な小丘などに本山の祭神を勧請し，本山への代わりに参詣することがあ

る。「模擬岩木山」もその一つであり，主に岩木山信仰圏の縁辺部に多く確認されるものである。これらは，柳川（㉛）や地元研究者の報告（⑭・㉗）によって，徐々に明らかにされるようになったが，いずれも事例紹介にとどまり「模擬岩木山」そのものへの検討はなされなかった。

これに対して，岩木山の信仰圏との関連から，それらを「模擬岩木山」と定義づけたのが，宮田登であった（㉖）。宮田は，いくつかの事例を紹介しながら，Ⅰ部落の小高いモリに岩木山祠が祀られている，Ⅱ祀られた年代は話者の記憶にあり，比較的新しい，Ⅲお山参詣方式は岩木山の模倣，Ⅳ部落内の神々の位置からいうと，オボスナのつぎに崇敬されているなどの特徴をあげて，これらを「模擬岩木山」と定義づけた。また，これらは基本的には富士塚と同様のものであり，近世的な山岳信仰の展開と評価した一方，「模擬岩木山」の多くがモリ山と呼ばれる村落から比較的近い小山であったことから，そこに祖先崇拝の痕跡があるとも指摘している。こうした山は，全国的に祖先の鎮まる聖地として祭祀対象なっている場合が一般的であり，「模擬岩木山」も元はそれらと同じものと想定したのである（㉖：291–95 頁）。

さらに岩木山自体も，昔は「アサへの森」というモリ山だったものが後に大山となったという伝承から，信仰が伝播する過程で，元々のモリ山への祭祀が「模擬岩木山」に変容していったとする（㉖：295 頁）。これは，岩木山信仰が近世の政治的影響の背後に，直接遙拝するという原初的な信仰形態を内在させるとする前述の解釈を補強したものである。

この宮田の説は，以後の研究において繰り返し引用・主張され（⑪：115–16 頁），「模擬岩木山」は岩木山信仰の「定説」となっている。しかし，この説は主に伝承や古代遺跡から想定されており，岩木山神の勧請以前に，そこで実際に祭祀が行われていたのかということを検証していない。またモリ山の「模擬岩木山」化を「近世的展開」として位置づけているにもかかわらず，明治期勧請の事例を紹介するにとどまっている。さらに，そもそも「模擬岩木山」がどのくらい存在しているのかという，基礎的調査も十分なされていなかった。

これに対し，小山は主に信仰圏への関心から，自ら確認した蟹田町の集中地

区を中心に 17 もの「模擬岩木山」を紹介し，それが岩木山から遠隔地域に卓越していることを示した。またその勧請年代も，神像が神仏分離以後に岩木山に安置されたものに類似したしていることから，明治以降の勧請であると指摘している（②)。さらに小山は，これに続く論考で，津軽地方においてモリ山や岩木山などに，死者や祖霊が籠もるというような事例がほとんど確認できないことを明らかにしており，祖先崇拝祭祀地としてのモリ山，「模擬岩木山」という図式に疑問を投げかけている（③)。

(2)「模擬岩木山」の諸相

したがって，「模擬岩木山」に関しては，モリ山的解釈を除外して，小山が規定する「岩木山神を勧請し，岩木山の「お山参詣」になぞらえた同様の登拝習俗や，もしくはそれに準じた信仰習俗を伴い，岩木山本山の代理的な役割や遙拝施設としての機能を果たす山，小丘を指す」（②：4 頁）と，あくまで岩木山信仰に限定したものとして理解すべきであろう。ただし小山のあげた「模擬岩木山」には，岩木山神を勧請していない高森山などを含める一方で，同様の白神岳などは除外しており，基準が曖昧である。厳密に考えれば前者も除外されるべきかもしれないが，これらには，岩木山に関連する伝承が存在し，また岩木山と同じ旧暦 8 月 1 日前後にそれに準じた参詣も行われている。よって，祭神は異なるが岩木山と同時期に同様の参詣習俗があるものも「模擬岩木山」に含めるべきと考えられる。

ここで基準に同時期としたのは，津軽地方において社寺参詣をおよそムラ単位で行う場合，多くはお山参詣とほぼ同形態をとることによる。つまり単に参詣習俗のみでは，それが「模擬岩木山」かどうか判別が困難になるのである。よって，本稿では岩木山以外の祭礼がほとんど確認されない旧暦 8 月 1 日前後に参詣を行うという基準をあえて設定した。

以上の基準により，研究書籍および論文，市町村史や民俗調査報告書等から，すでに「模擬岩木山」とされたものと，筆者が判断したものを合わせて，20 の「模擬岩木山」を確認した（表・図の **1〜20**）(1)。

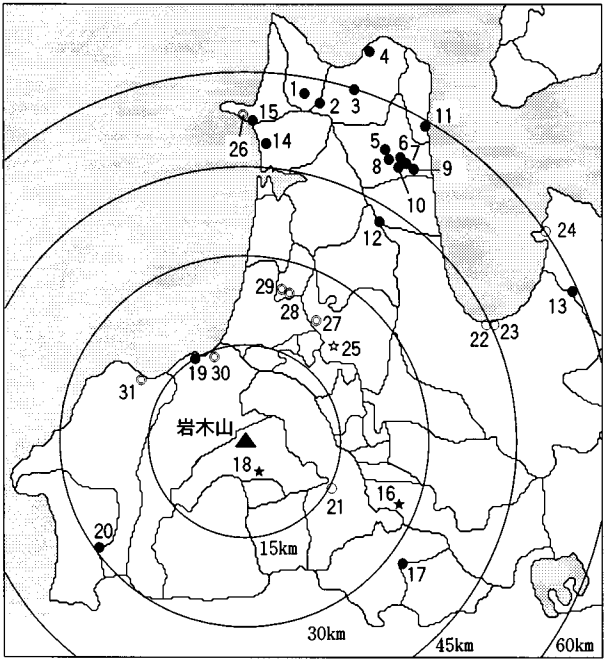

図　模擬岩木山等の岩木山関係の宗教景観
注）●：「模擬岩木山」，○：末社，◎：石碑
★：「模擬岩木山」とされるが除外すべきもの
☆：末社とされるが疑問の残るもの
番号は表に一致

I 景観的および民俗的特徴　まず「模擬岩木山」の分布に注目すると，大半が岩木山から遠方の津軽半島部に存在することが確認される。次にそれらの標高については，過半数が 100 m 以下になっており，やはりモリ山的なものが多い。ただし，磯山の岩木山神社（**11**）や折戸の岩木山大権現堂（**15**）などは，集落から 5 分もかからないような場所にあり，後述する末社と類似している。逆に標高が高いものは，白神岳（**20**）や阿闍羅山（**17**）などで，いずれも本格的登山を必要とするものである。このように「模擬岩木山」には，高山から丘まで様々なレベルのものがある。

次に，岩木山本山が可視的に遙拝可能か否かについては，可視・不可視がほ

表　岩木山関連の「模擬岩木山」・末社・石碑

番号	名　称	所　在　地	標高	岩木山	祭　礼　日	祭神等	岩木山との伝承	参詣地域	集団参詣	歴　史　そ　の　他	文　献
1	増川岳	三厩村	5	可視	旧 8/1?	他		三厩村		岩木山に行かない人が，お宮のあるところまで登った	㊾
2	浜名岳	今別町	5	不可視	旧 8/1→直前の日曜日	他		今別町浜名	有	第二次大戦以前　1965 年頃中断，84 年復活	㉗
3	岩木山神社	今別町大川平	2	不可視	旧 8/1・旧 8/15→旧 8/1	岩木山	有	今別町・三厩村	有	明治期？　地元の庄屋が祠を建立，明治中頃に青年団が貰い受け，参詣行われるという	②・⑨・⑪・⑭・⑯・㉖・㉗・㊶・㊾
4	ノロシヤマ	今別町大泊	2	不可視	旧 8/1・旧 8/15	岩木山		所在地と同	有	天保年間に堂社建立という　1968 年より中断，94 年復活	②・⑨・⑭・㉗・㉜・㊾
5	イワキサン	蟹田町大平	2	不可視	旧 8/1→新 9/1	岩木山		所在地と同	有	第二次大戦以前からという	②・㉘・㉜・㉞
6	イワキサン	蟹田町上小国	2	不可視	旧 6/15・旧 8/15	岩木山		所在地と同	有	明治期？　神像の送迎行為有	②
7	丸山・イワキサン	蟹田町下小国	2	不可視	旧 6/15・旧 8/1・旧 8/15	岩木山		所在地と同	有	明治期？　神像の送迎行為有	②
8	角橋沢山中腹・イワキサン	蟹田町山本	2	不可視	旧 6/15・旧 8/1・旧 8/15→新暦	岩木山		所在地と同	有	明治期？　神像の送迎行為有	②
9	前山・イワキサン	蟹田町外黒山	2	不可視	旧 6/15・旧 8/1	岩木山		所在地と同	有	明治期？　神像の送迎行為有	②
10	イワキサン	蟹田町南沢	2	不可視	旧 6/15・旧 8/1	岩木山		所在地と同	有	明治期？　神像の送迎行為有	②
11	岩木山神社	平舘村石浜字磯山	1	不可視	旧 8/1	岩木山		所在地と同		鉱山開発者による勧請という	②・⑩
12	大倉岳	蓬田村・金木町	5	可視		他		青森市後潟	有	1930（昭和 5）に山頂に祠建立，参詣行われる	東奥日報（1930 年 9/18 夕刊）
13	高森山	平内町山口	4	不可視	旧 8/15→新 8/15	他	有	所在地と同	有	雨乞の山	②・㉒・㉗
14	靄山	市浦村脇元	3	可視	旧 8/1	岩木山	有	市浦村・小泊村・中里町・金木町	有	明治期？　大正末～昭和初期に岩木山神社からの抗議より同社遙拝所となり参詣も自粛？	②・④・⑪・⑭・⑰・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㊾・㊿
15	岩木山大権現堂	小泊村折戸	1	可視	旧 8/1	岩木山		所在地と同		堂内に阿弥陀・観音・薬師の石仏（1844（天保 15）8 月建立）あり	②・㉕・㊻
16	鳥海山神社	平賀町沖舘	2	可視	旧 6/1	他		所在地と同	有	参詣時期が岩木山と不一致	②・㊶・㉕・㉗
17	阿闍羅山	大鰐町	5	可視	旧 8/1	（岩木山）	有	大鰐町・弘前市南部	有	1889（明治 22）年に伝百沢寺本尊が山寺（専弥院）に遷座され，参詣が始まる　近世期，紫雲会の登拝行事および雨乞いあり	②・㉘・㊸・㊸・㊹
18	守山	岩木町	4	可視	旧 4/15→旧 6/12	他	有	岩木町百沢・弘前市国吉		近世期，岩木山神社内に本地仏を安置する堂あり　参詣習俗確認できず	②・㊶・㉕・㉗
19	日和山	鯵ヶ沢町小夜	2	可視	旧 8/1	岩木山		旧鯵ヶ沢町内		岩木山形の岩（1858（安政 5）8 月 1 日建立）あり	②・㊼・㊾・㉙・㊲・㊳

番号	名　称	所 在 地	標高	岩木山	祭 礼 日	祭神等	岩木山との伝承	参詣地域	集団参詣	歴 史 そ の 他	文　献
20	白神岳	岩崎村	5	可視	旧 8/1・旧 7/29	他	有	岩崎村大間越	有	近世期からか？　1855（安政 2）の文書に「白神山大権現」，1870（明治 3）の文書に「年々同村于登山罷有候」とあり	⑧・⑰・⑳・㉖・㉗・㉘・㉜・㉞・㊵・㊽
21	泉光院	弘前市西茂森	2	可視		岩木山				堂再建の 1790（寛政 2）の棟札あり	⑪・㊺
22	岩木山神社遙拝殿	青森市長島香取神社	1	可視	旧 8/1	岩木山		旧青森市内		1855（安政 2）の文書に 1844（弘化元）再建とあり　現在，移転合祀	㉓・㉟・㊱・㊽
23	岩木山神社	青森市浦町神明社	1	可視		岩木山				境内に 1930（昭和 5）建立の「岩木山」碑あり	㊱
24	観音堂（岩木神社）	平内町浦田字馬屋尻	1	不可視		岩木山				1644（正保元）9 月建立という　明治初年に廃社，後に復社	①・㉒・㊷
25	白衣神社	五所川原市	1	可視		岩木山？				元は若木山大権現か？	⑬・⑱・㊽
26	（岩木山）	小泊村下前熊野神社	2	可視		岩木山				「岩木山」と墨書された自然石的な石碑	㉕・㊻
27	「岩木山　浅間大」	五所川原市三好字高瀬	1	可視		岩木山				個人宅にあり	⑥
28	「岩木山」	稲垣村沖善津稲荷神社	1	可視		岩木山				レリーフ状に岩木山を表現	㊴
29	（銘判読不能）	稲垣村再賀石上神社	1	可視		岩木山				自然石	㊴・㊼
30	「岩木山神社」	鯵ヶ沢町舞戸町上野稲荷神社	1	可視		岩木山				1921（大正 10）1 月建立	㉙・㊲
31	「岩木山神社・猿田彦・二十三夜」	深浦町関八幡宮	1	可視		岩木山				1897（明治 30）旧 4 月 1 日建立　庚申塔的石碑	㊵

注 1）標高に関して，1：30 m 以下，2：30〜100 m, 3：100〜300 m, 4：300〜600 m, 5：600 m 以上。
2）番号は図に一致
3）文献番号は，参考文献に一致

ぼ二分され，一概にどちらがとは言いがたい。岩木山が見えるものでは，参詣時に祠などとともに，岩木山へも手を合わせるという習俗が行われることもあり，特に日和山（**19**）や増川岳（**2**）などは，同所への参詣以上に遙拝所としての機能を有している。しかし，遙拝がすべての「模擬岩木山」の条件には，必ずしもなっていないと考えられる。

さらに，祀られている祭神について，標高の低いモリ山的なものはおおむね岩木山神を勧請している。それに対し標高の高いものは，景観的にも山岳としての独立性が強く，祭神も独自のものを祀っている。白神岳などが「模擬岩木山」から除外されたのは，このためと考えられるが，それらは，岩木山と同時期に参詣され，あるいは関連する伝承を有することから「模擬岩木山」に含まれると考えられる。

一方，既存研究で取り上げられていた鳥海山（**16**）は，岩木山との伝承もなく，また祭礼日が一致しておらず，前述した基準からすれば除外されるとも思われる。また里宮の岩木山神社に近い岩木山麓に位置する守山（**18**）は，近世に通常登拝できない岩木山の代わりに参詣した山とされている（⑪：116頁）。しかし，それを裏付ける資料はなく，また登拝できない場合は，里宮がその代理となるのであり，わざわざ守山に参詣するのは，むしろ不自然であろう。さらに祭礼日も異なることから，これも「模擬岩木山」から除外した方が妥当と考えられる。

II 勧請および参詣の歴史　これらの特徴以上に重要なのが，「模擬岩木山」がいつ勧請され，参詣されるようになったかである。本稿で提示した「模擬岩木山」のうち，その起源が明確に確認できるものは多くはない。既存研究では，モリ山祭祀や津軽藩との関連から近代以前に遡るとされている。しかし，蟹田町の集中地区（**5〜10**）の事例報告などからは，主に明治期に開始されているのである。そこで以下では，事例を紹介しつつ，その起源および背景について検討してみたい。

事例 1　阿闍羅山（**17**）　阿闍羅山は，津軽地方南部の大鰐町および碇ヶ関村に位置する標高 709 m の山で，人里に隣接しているため，一際目立つ山容を

呈している。この山および山麓は，「阿闍羅千坊」とも伝えられるように，古くから宗教的拠点となってきた。それは例えば，古代に阿闍羅山上に創建され，後に現在地の山麓に移転したという縁起伝承を持つ国上寺や，鎌倉前期の阿弥陀如来を安置する大円寺（旧高伯寺）などの存在から推察される。一方，周辺地域の民俗資料からは，岩木山と同時期に登拝が行われていることが確認されている（㉝：19 頁）。

さらに阿闍羅山への登拝は，近世等の資料においても確認できる。それは主に 2 つの目的からなされている。1 つは雨乞い祈願によるもので，旱魃時に僧侶などの宗教者が山頂で 1 週間ほど籠もって祈祷を行っている（㊸，449–50 頁）。ただしこれは，あくまで臨時に行われるものに過ぎず，同様の習俗は，岩木山や高森山（**13**）などでも，お山参詣とは無関係に行われていた（㊷：90 頁）。

これに対し，1876 年（明治 9）に編纂された『新撰陸奥国誌』には，「紫雲会」という習俗について記している。これは「映山の満開の季に」，山麓の大鰐・蔵館の村民が山頂の小祠に参拝し，傍らにある「小十和田」という小池に白紙に三粒の米を包んで投げ入れ，その浮き沈みによって「願望成就」を占ったという（⑦：189 頁）。これと類似した習俗は，主に農作物の豊凶を占うため岩木山のお山参詣時に山中の「種蒔苗代」で行われることをはじめとして，各地の山岳で見られる。また「紫雲会」という名称が，山頂付近にあった紫躑躅によるとされるから，この習俗は，5 月から 6 月にかけての時期に行われていたと思われる。仮にこれが，近代以降行われた参詣の原型とするならば，近代のいずれかの時点で変更されたとも想定される。

しかし，民俗資料から確認される参詣は，「紫雲会」とは無関係と思われる。『大鰐町誌　下巻』によると，山頂に権現宮の小祠が建立された 1889 年（明治 22）頃より旧暦 8 月 1 日の参詣が開始されたという（㊹：896 頁）。これには，現在大鰐町袴越にある専称院が関係していた。専称院は，もともと阿闍羅山西麓の稗田沢にあった観音堂であったが，神仏分離で廃寺になった百沢寺（岩木山別当）にあったと伝えられる十一面観音像が，同年にこの堂に勧請

されたのである。さらに翌 1890 年（明治 23）以降，観音堂には百沢寺や岩木山頂に安置されていた仏像が，次々に勧請され周辺地域の信仰を集めるようになった。そして，1900 年（明治 33）には現在地に移転し，1902（明治 35）には青森県に対し，観音堂を「阿闍羅山百沢寺」として寺院昇格させる申請を出している。結局，この申請は受け容れられず，1904 年（明治 37）に岩手県から専称院の寺格を譲り受けて現在に至っている（㊹：928–38 頁）が，岩木山関連仏像の勧請や「百沢寺」の名称申請などから，ここに観音堂を岩木山と直接的に関係づけようとした意図が窺われる。

こうした中で，阿闍羅山への登拝が開始されるに至る。大正期の新聞記事には「岩木山神社の御神体は維新の新体制の故を以て當村専称院脇の観音堂に遷座し爾後毎年旧八月一日の命日には阿闍羅山上に之を奉智して祭典を執行し来りし」（弘前新聞 1916 年（大正 5）8 月 25 日）とある。つまり，阿闍羅山は「紫雲会」より継続したものではなく，近代における観音堂の寺院昇格運動の中で「模擬岩木山」的存在になった考えるほうが妥当であろう。

事例 2　靄山（**14**）　靄山は，北津軽郡市浦村の脇元集落の裏手にあり，その名称や景観からモリ山のイメージを喚起させる標高 153 m の山である。ここには靄山（本家）から岩木山（分家）が移ったという伝承（㊿：122 頁）があり，旧暦 8 月 1 日には脇元周辺の人々が，山頂にある脇元岩木山神社に参詣している。しかし，その歴史についてはほとんど確認されていない。

伝承によると，靄山は近世より岩木山神を勧請し参詣も行われ，近代以後も継続したが，里宮の岩木山神社から「達し」のために遙拝所となり，戦後になって復社したという（④：81 頁）。これに関して，1935 年（昭和 10）の新聞記事に「十年以前迄は五所川原，金木方面よりも数千の参詣人が集り掛茶屋，興業物などもあり数日に亘り頗る賑ひを呈したが，その後一寸した事情のため自然に足も鈍り近年は堂宇が朽ち路は草に荒れて見る形もないまでに廃れた」ので，脇元の住民が「振興同盟会を結成して復興を呼びかけた」ことが記されている（東奥日報 1935 年（昭和 10）8 月 29 日夕刊）。このことから，伝承にあった「達し」は，大正末期頃に出されたものと推定され，それ以後は参詣が

自粛されていたと考えられる。

しかし，近世に岩木山神が靄山に祭祀されていたことを示す資料は確認されていない。むしろ，この所有者が主に明治期に隆盛を極めたニシン漁の網元であることから，この網元によって同時期に勧請されたと想定される。

以上，「模擬岩木山」の事例を紹介したが，表に提示したものも含めても，やはり近世に遡れるものは少なく，むしろ近代以降に顕著になってきたものであることが確認できる。この点から，モリ山祭祀を基層とし，近世の岩木山信仰の伝播が「模擬岩木山」を発生させたと考えるのは困難である。さらに，岩木山を保護した津軽藩は，自らが直接管理した里宮以外の堂社勧請には消極的であり，またいわば藩の公的宗教施設の祭神を，みだりに勧請できない雰囲気が存在したとも考えられる。

III　岩木山関連の末社・石碑

前述の通り，「模擬岩木山」以外の堂社にはこれまでほとんど関心が寄せられなかったが，市町村史類などからは，表の **21**～**31** に提示したように，岩木山神を勧請した末社や石碑が確認される(2)。その分布は，「模擬岩木山」とは異なり距離的な特徴は確認できないが，石碑はすべて岩木山が望見可能な地域に分布している。またこれらは，多くが神社境内などに存在し，山や丘などに祀られたものとは異なる様相を呈している。この点から，本稿ではこれらを「模擬岩木山」とせずに，あえて別項目としたが，一方でそれらと同様に，多くの参詣者を集めたものも存在する。よって以下では，それらの歴史および機能について検討する。

事例 3　香取神社末社「岩木山神社」(**22**)　表に提示した岩木山の末社のうち，最も多くの参詣者を集めたと思われるのが，青森市内の柳町にあった香取神社内の「岩木山神社」である。香取神社は，近世毘沙門堂と呼ばれており，当初は文殊院，後に地福院という修験が別当となっていたという（㊱：103 頁)。前出の 1855 年（安政 2）8 月の「神社微細社司由緒調書上帳」(㊽）に

は，毘沙門堂およびその末社が記載されているが，その中に「岩木山遙拝殿」という堂社が確認される。この堂は，同資料によると 1844 年（弘化元）再建と記され，それ以前から祭祀されてきたと想定される。また祭礼日は，8 月 1 日で「講中」によってなされているとも記されており，近世末には，民衆により参詣されていた可能性を窺わせている。この「岩木山遙拝殿」は，近代に入り「岩木山神社遙拝殿」と改称されたが戦災で全焼し，戦後は「岩木山神社」として再建された（㊱：92–97 頁）。しかし近年，香取神社が青森市郊外に移転し，「岩木山神社」は合祀された形となっている。

ここで注目されるのは，ここでの祭祀が「講中」とあるように別当の地福院関係者にとどまらず，広く青森の民衆が参詣する，比較的大規模なものであったと考えられることである。それは，これより 20 年ほど下った 1875 年（明治 8）「岩木山神社の御祭事とて當年當町及近郷の人々登山も少からす県庁よりは一昨日を以て奉幣使御発に相成り町中は一統簾や暖簾を下けて休業し信仰者は群をなして香取社内岩木山遙拝所に参詣せり」という資料がからも窺われる（㉟：775 頁）。この間に，神仏分離などの施策が行われたため，祭礼に変化があったとも思われるが，ここが「模擬岩木山」的な機能を果たしていたことは確認される。こうした状況は例えば「本日は當市柳町岩木山神社遥拝所の縁日あり」（東奥日報 1908 年（明治 41）8 月 26 日）などと新聞記事に記されており，少なくとも明治末期，おそらくは戦前まである程度の参詣者を集めていたと考えられる。

また同様のものは，青森市内の浦町神明社境内にも存在しており（**23**），青森という都市的な場所でも岩木山信仰が根強いことを示唆している。加えてここには，農漁村部のように団体参詣をしない民衆が個人的に参詣しており，これは港町の西津軽郡鰺ヶ沢町にある日和山（**19**）も同様であったと推測される。つまり，これらの末社も「模擬岩木山」的存在であったと解釈することができよう。

なお最後に，岩木山関連の石碑（**26〜31**） について付言しておく。これらは，末社同様に神社境内に多く存在しており，「ここで拝んででも御利益があ

るようにと建てられた」（㊼：80 頁）ものという。その形態には岩木山の形を模したと見られるもの（**26・28**）が見受けられることから，それ自体で岩木山を模していると理解される。この意味では，石碑も「模擬岩木山」的存在であり，さらに岩木山を望見可能であるという特徴から，その遙拝機能も有していたと考えられる。

以上，岩木山関連の末社・石碑について検討した。景観的には差異はあるものの，これらは「模擬岩木山」と同じ機能を有している。また末社に関しては，都市部に顕著であり，勧請年代が近世に遡るものも存在している。このことは，前述した津軽藩や百沢寺の消極姿勢の中でも，勧請がなされていたことを示唆している。数が少ないので断定はできないが，岩木山神の勧請は，あるいは遅くとも近世末に主に都市部から始まり，近代以降に周辺部に波及していったとも想定される。

Ⅳ　おわりに

以上，岩木山関連の宗教景観について，「模擬岩木山」および末社・石碑を中心に検討した。「模擬岩木山」は，これまでモリ山祭祀の変型と認識されてきたため，景観的に合致しない白神岳などの山岳を除外してきたが，機能的にはこれらも含まれると考えられる。それに対して，末社は都市部に多く確認されるが，やはり同じ機能を有しており，これについては石碑も同様であった。また勧請年代は，「模擬岩木山」は近代以降のものが大半であったが，末社はそれより古く，近世まで遡るものが存在した。つまり，山ではない場所に，より古い岩木山関連社が存在していると考えられる。これは，モリ山を前提にした既存の「模擬岩木山」概念とは整合せず，むしろ機能的には末社・石碑も「模擬岩木山」に含めても問題はないと考える。

これを信仰圏との関連で考えれば，遠隔地では，岩木山本山に参詣する回数は少ないため，ある程度は山に登るというプロセスを必要とする「模擬岩木山」が卓越する。反対にそれ以外の地域では，本山への参詣が容易であるが故

に，末社や石碑を勧請する程度に済ましたと想定され，またこれは個人参詣が多い都市部においても同様であったと思われる。このような図式により，現段階では両者は一応境界づけられるが，今後新たなものが確認される可能性もあり，さらなる調査検討が必要となろう。

〔付記〕「神社微細社司由緒調書上帳」の閲覧にあたっては，所蔵先の最勝院にご協力していただいた。ここに感謝申し上げる。

注

⑴ なお本稿では，青森県人が多数移住した北海道にある「模擬岩木山」および末社等を取り上げられなかった。これらは信仰圏の関連から重要な要素であり，稿を改めて検討したい。

⑵ ただし，五所川原市田町にある白衣神社（**25**）は，岩木山神を勧請しているとされるものの，その経緯には疑問が残る。同社は，もともと疫病退散のために大黒天を祀っていたが，後に近隣にあった神明社末社の三社宮の祭神であった大巳貴命（岩木山大明神）を合祀したものという（⑱：265–66 頁）。しかし，「神社微細社司由緒調書上帳」に記載された三社宮の部分には，合祀された祭神として「若木山大明神」と記載されている。これは，山形県東根市にある疱瘡除けの信仰を集めた若木神社を勧請したものと考えられるが，その祭神は岩木山とは異なる大日霊貴尊である（㊿：590 頁）。ところが，戦前の郷土誌では，同じ部分を「岩木山大明神」と翻刻しており（⑬），明らかに「岩」と「若」の字を誤読している。このことから同社は，当初は「若木山」だったものが，読み間違えられて「岩木山」として祭祀されるようになったと推定できる。さらにこうした誤読は，他にも散見される。例えば「神社微細社司由緒調書上帳」を元にして，近世堂社の一覧表を作成した『津軽史事典』（㉓）には，現在の西津軽郡岩崎村にあった神明社（廃絶）の末社として「岩木権現」，南津軽郡大鰐町にあった稲荷宮（廃絶，後に復社）末社の「岩木疱瘡神社」が記載されているが，これらはすべて若木山を岩木山と誤読したものである。また，この「岩木権現」に関して，神仏分離でこれが廃絶した際の資料を紹介した『岩崎村史　下巻』でも，「岩木山」としているが，この別称が「疫神神社」となっていることからして，やはり「若木山」の読み違いであろう（㊵：1191–92 頁）。同様に鯵ヶ沢町建石にある 1858 年（安政 4）の銘のある「岩木山大権現」とされる碑（㉙：37 頁）も，実際に確認すると「若木山大権現」であった。疱瘡という信仰の特徴から，若木山は種痘の普及した近代以降，津軽においてほとんど忘れられた存在となっている。このために，それを馴染みのある岩木山と誤解したのであろう。今後の調査研究にお

いても注意が必要と思われる。

参考文献（各番号は，本文・表に一致）

①大瀬熊太郎『平内志』，1941。
②小山隆秀「模擬山習俗からみた岩木山信仰――信仰圏の設定をめぐって――」，日本民俗学 203, 1995。
③小山隆秀「岩木山信仰における祖霊論の再検討――オイワキヤマに死者は行くのか――」東北民俗研究 7, 2001。
④葛西安十郎『市浦　その史跡を訪ねて』，西北刊行会，1985。
⑤金子直樹「岩木山信仰の空間構造――その信仰圏を中心にして――」，人文地理 49–4, 1997。
⑥川口俊亮『五所川原の石仏・石塔』，石仏石塔研究会，1983。
⑦岸　俊武『新撰陸奥国誌　第二巻』，1876（『みちのく双書　第十六集』，青森県文化財保護協会，1965）。
⑧日下部　照『岩崎探勝案内』，岩崎保勝会，1931。
⑨肴倉彌八『今別町史』，今別町，1967。
⑩肴倉彌八『平舘村史』，平舘村，1974。
⑪小館衷三『岩木山信仰史』，北方新社，2000（初版 1975）。
⑫小舘衷三「岩木山の山岳信仰」，（月光善弘『山岳宗教史研究叢書 7　東北霊山と修験道』），名著出版，1977。
⑬斎藤匡則『五所川原町誌』，五所川原町役場，1935。
⑭品川弥千江『岩木山』，東奥日報社，1968。
⑮柴田重男『新岩木風土記　続々』，津軽書房，1987。
⑯嶋中幸雄『東津軽郡今別町大川平』，青森県児童文学研究会，1981。
⑰桜井冬樹『西浜往来』，北方新社，1988。
⑱佐々木達司『五所川原三百年史　文化編』，青森民有新聞社，1967。
⑲南波松太郎『ものと人間の文化史 60　日和山』，法政大学出版局，1988。
⑳成田末五郎『岩木町誌』，岩木町，1972。
㉑西口正司『白神岳　周辺ガイドと風土』，岩崎村むらおこし事業推進委員会，1988。
㉒平内町『平内町史　上巻』，平内町役場，1977。
㉓弘前大学国史研究会『津軽史事典』，名著出版，1977。
㉔弘前大学民俗研究部『こまおどり 20　市浦村民俗調査報告書』，1977。
㉕弘前大学民俗研究部『こまおどり 24　小泊村民俗調査報告書』，1983。
㉖宮田　登「岩木山信仰――その信仰圏をめぐって――」，（和歌森太郎『津軽の民俗』，吉川弘文館），1970。

㉗村上義千代『あおもり 110 山』，東奥日報社，1999。
㉘森山泰太郎『郷土を科学する 1　津軽の民俗』，陸奥新報社，1965。
㉙森山嘉蔵『鰺ヶ沢町文化シリーズ 1　鰺ヶ沢地方の石塔碑』，鰺ヶ沢中央公民館，1980。
㉚森山嘉蔵『深浦地方の石塔碑』，深浦町教育委員会，1984。
㉛柳川啓一「岩木山まいり」，社会と伝承 2–4, 1958。
㉜『青森県の民間信仰』，青森県民俗資料図録 3, 1976。
㉝『青森県民俗資料調査報告書 2』，青森県教育委員会，1964。
㉞『青森県民俗資料調査報告書 3』，青森県教育委員会，1965。
㉟『青森市沿革史　下巻』，東奥日報社，1909。
㊱『青森市史　第十巻社寺編』，青森市，1972。
㊲『鰺ヶ沢町史　第三巻』，鰺ヶ沢町，1984。
㊳『鰺ヶ沢の文化財』，鰺ヶ沢町教育委員会，2001。
㊴『稲垣村民俗調査報告書 2　稲垣の民俗信仰』，稲垣村教育委員会，1993。
㊵『岩崎村史　下巻』，岩崎村，1989。
㊶『宇鉄の民俗』，青森県立郷土館調査報告 21, 1987。
㊷『浦田の民俗』，青森県立郷土館調査報告 10, 1981。
㊸『大鰐町誌　中巻』，大鰐町，1995。
㊹『大鰐町史　下巻（二）』，大鰐町，1998。
㊺『金華山泉光院史』，泉光院建設委員会・記念誌編集委員会，1985。
㊻『小泊村史　下巻』，小泊村，1998。
㊼『再賀の民俗』，青森県立郷土館調査報告 42, 1998。
㊽「神社微細社司由緒調書上帳」，最勝院蔵（青森県立図書館マイクロフィルム），1855。
㊾『津軽半島北部山村振興町村民俗資料緊急調査報告』，青森県教育委員会，1970。
㊿『東根市史　別巻上』，東根市，1989。
51『脇元の民俗』，青森県立郷土館調査報告 19, 1985。

――大学院文学研究科研究員――